

---

# 黒き椿

紫藤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒き椿

### 【Zコード】

Z5893Y

### 【作者名】

紫藤

### 【あらすじ】

鳥居夏実が主人公です。

普通の日常を送っていた夏実はある事故をきっかけに妖怪となるお話です。

原作の鳥居の設定と大幅に違うのでご注意を。  
ただ今『遠野編』です。

登場人物紹介 遠野編

鳥居

とりい  
トウイ

♪ 1 3 5 4 7 9 — 4 4 4 3 <

主人公。ある事故をきっかけに妖怪になってしまふ。  
奥州遠野で今は『己が何者であるのかを知る』ために  
修行をしている

事故のことだけは憶えているが、  
人間であつた時の記憶は無くしている

冷麗

レイラ  
レイラ

奥州遠野の妖怪、雪女。鳥居の良き理解者?  
物腰の柔らかい女性

淡島

あわしま  
アワシマ

奥州遠野の妖怪、天邪鬼。  
あまのじやく  
アマノジヤク

ぶつきらぼうの口調

鳥居の修行相手になる

赤梅

あかうめ  
アカウメ

♪ 1 3 5 4 8 1 — 4 4 4 3 <

奥州遠野の妖怪。見た目は十代前後の女の子

悪戯好き

鳥居のことを『とりー』と呼ぶ

赤河童

奥州遠野の総大将

## 序章

放課後、教室にはいつも清十字怪奇探偵団の面子がそろっていたが、やつていることは皆ぱりぱり

力ナは数学の宿題を黙々とやり、次郎はなんか雑誌を読んでいる  
巻は鏡を見ながら髪をいじくっている

鳥居机の上に肘をたてて頬づえをしつつ

そんな一同を見て「はあ……」と溜息をついた

暇だなあ……

窓の外ではもう日が沈み始め、きれいな夕焼け空が広がっている  
その鮮やかな橙色の陽の光が教室の中に差し込んでいた

「おつまたせ　一昨日もつそろつたかい」

教室のドアを勢いよく開けハイテンションで現れたのは清継  
この清十字怪奇探偵団の団長である

「本当に遅れですまなかつたよ

授業終わるのは遅いし、校門前の掃除は時間がかかるし  
……あれ? ゆら君とリクオ君は休みかい?」

「リクオ君もゆらも家の用事があるって言つて、  
随分前に帰っちゃつたよ」

力ナは終わつた宿題を鞄の中にしまいながら言つ

「じゃあ、あたし達もお開きにしない?」

面倒臭そうに巻が鏡から顔を上げた

ナイス巻!

心の中で鳥居は親指をたてる  
こんなとこにいるより早く家に帰りたいのが鳥居の本音だった

「ちよおおおつと待つたあああー…」

突如、清継が手を上げる

「実は最近ある怪談話が話題になってるんだ」

「怪談?」

なぜかカナがびくりと反応する

「せうれ。ネットで詳しへ調べたんだけビセ……」

「はー」

「何だい、鳥居君。質問かい?」

手を上げる鳥居を清継がてる

「妖怪つてそもそもいるの」

「はははー!なに言つてるんだい。居るに決まつてるじゃないか!」

「でも証拠もないのにこりつて言われても……ね、カナ」

「え!」

いきなり話を振られたカナは一瞬あたふたしたが、  
少し考え込むと顔を上げた

「ん、まあいるんじゃない?」

「え、カナ、信じてるの!?」

「そうかも……」

「マジですか?」

がくっと肩を下げる鳥居

「んじゃあ、鳥居君の質問は終わったみたいだから  
例の怪談話をするね」

清継は怪談話をし始めた

「はあ、やつと今田も一田終わったねえ」

巻が背伸びをする

対する鳥居は「そうだね」と相槌あいづちを打つた

部活も終わり今は学校の帰り道

二人は十字路の道路の横断歩道前で信号待ちをしていた

「そう言えばさあ、もうすぐテスト期間だな……」

「う、頭痛がしてきた……」

巻の言葉に鳥居はげつそりとする

「鳥居つてテスト終わつたら暇?」

「うん、ただけど」

「じゃあ、食べに行かない?美味しい店見つけひやつてさ」

「うん、行く行く!」

鳥居は目を輝かせる

巻は嬉しそうににかつと笑つた

「よし、じゃあ決定

そこで調度歩行者信号が赤から青に変わった  
一斉に信号待ちをしていた人達が渡り出す

鳥居と巻も少し遅れて歩きだした

横断歩道を半分まで歩いた時

事は起こつた

それは一瞬だつた

まず誰かの叫び声が聞こえ

鳥居が横を振り向くと、目の前に大トラックが迫っていた  
隣には巻がいる

鳥居は巻を両手で思いつきり突き飛ばし、その反動で後ろに体が傾く  
巻は何が起こったのか分からぬ表情で

トラックから離れたところに派手に転がり込んだ  
そしてトラックの激しいブレーキの音が鳴り響き  
鳥居の体は宙に浮いて激しく地面に打ち付けられた

「な、なんのもう」

体中のあちこち打つ痛みに耐えながら巻は体を起こす  
横断歩道の真ん中には不自然な角度でトラックが止まっており  
そのすぐ傍に2、3人の大人達が集まつて何か騒いでいた

「なんなの、これ」

「ちょっと大丈夫？」

巻の傍にひとりの女性が駆け寄つてきた

心配そうな表情をしている

巻は慌てて立ちあがつた

「はい、大丈夫です」

「よかつた……今、救急車を呼んだから」「

「は、はい……」と言つたところで巻ははつとした

「鳥居……、あの私の隣にいた友人を知りませんか！」

「あ、あなたの隣にいた子はあそこに……」

女性は気まずそうに視線を反らす

その先はトラックの傍にかたまつている人だまりだつた

巻は迷わず人だまりに向かつて駆けだした

人をかき分け前へ出る

そして巻は息をのんで絶句した  
目の前に赤い血だまりが弧を描くようにゆっくり広がって道路を染  
めている

その鮮血の池の中には人が横向きの態勢で転がっていた  
それは巻がよく知っている人  
ついさっきまで元気だった  
ついさっきまで元気だった

「鳥居……？」

鳥居の返答はない

彼女の見開いた目はもう生気が宿ってなかつた  
「うそでしょ？」

がくんと膝が崩れ巻はその場に座り込む  
周りの人達の声はもう耳に入つていなかつた

誰かが自分のことを呼んでいる  
真つ暗な闇の中、鳥居は声のする方へ振り向いた  
向こうから大トラックがスピードを出して迫ってきている

逃げなきや……

いや、

私は逃げなかつたんだ

大切な友人がいたから

鳥居は自分の隣を見た  
そこには巻がいた

両手を組み悲しそうな笑みを浮かべて立つてゐる

「そつ。鳥居は巻という友人を助けるために、自らを犠牲にしたんだ」

そうだ

私はあの時、とつさに巻をトラックから離れたところに突き飛ばしてたんだ

そして私はそのまま

「トラックに轢かれた」

巻がそう言つた瞬間、うるさいぐらい大きなブレーキ音が響く  
見ると鳥居の目の前にトラックが  
もう逃げられない距離まできてい

だが鳥居はその時見たのだ

トラックの運転座席に乗つっていた人は……

誰かの声がする

また自分のことを呼んでいるのかな

女の人の声だ

「ちょっと大丈夫？」

誰だろう

鳥居は目を開いた

短い草の生えた柔らかな土の上

鳥居はつづくまつて横になつていた

「よかつた……」

傍に見知らぬ人がしゃがみ込んでいる

白い着物きて淡い桃色の髪を結つた綺麗な女性だった  
「もし死んでいたらどうしようって心配したわ」

「あの、誰ですか」

鳥居は上半身を起こす

「私は冷麗よ。<sup>レイラ</sup>見たところあなたも妖怪みたいね。名前は？」

「私は鳥居……」

あれ？

鳥居は言いつまつた

下の名前が思い出せない  
なんで？

さつきまで憶えていたのにふと忘れてしまった時の感覚に陥る  
ちよつとしたイライラ感

だが相手はそんな鳥居のことに気が付いておらず

「そう、鳥居さんね。よんじく

と微笑んだ

「さつそくだけど、いじはせじだか分かる？」

「え……」

鳥居は辺りを見渡した

周りは鬱蒼<sup>うつそう</sup>と茂つた木々に囲まれ、日<sup>じ</sup>の光を遮つている  
何処かの山の中だらうか

「分からないです……」

申し訳なさそうに鳥居は答える

「ここは奥州遠野。妖怪の村よ」

「妖怪……？」

「そうよ。ここは通常の場所よりも妖気がとても濃いところなの」

「えつと……妖気ってなんですか？」

冷麗はその言葉に少し目を見開いて驚く

「妖気を知らないって……あなたそれでも本当に妖怪なの？」

でもあなたから確かに妖気が漂っているわ

鳥居は考え込む

「ここはジメジメとした感じのことですか？」

「うん、そういうところかしらね。

それより、どうしてあなたがこんなところに倒れていたのか教えてくれないかしら

そもそもあなたは何処から来たの？」

「多分、浮世絵町とこいつの町から……どうしてここに来たのか分から

ないけど」

「浮世絵町ってねうりひょんの……」

眉をひそめる冷麗

だがぽかんとこいつを見ている鳥居に気が付いて

「いいえ。なんでもないわ」と首を横に振った

「記憶がないっていっていのほしやつかいね。取り合えず、総大将の

ところに行きましょ「

「総大将?」

「そう。奥州遠野の総大将、赤河童様よ。  
あなたその分じゃ、随分ここに厄介になりそつだから」

冷麗はにこりと微笑んだ

冷麗の案内で鳥居は奥州遠野の総大将、赤河童のいる屋敷にたどり着く

屋敷の大きさに鳥居は圧倒されつゝも、他の妖怪から総大将のいる部屋に通された

「こいが総大将の部屋だよ。さつさと入りな」

妖怪に促され、鳥居はぐくりと唾を飲み込むと部屋の中に入った

広い部屋だった

左右には様々な形相をした妖怪達が数えきれないほどおり、それぞれ口々になにか喋っている

嘲け笑うもの

なにやら熱心に話し合つ者

鳥居は委縮して前を見る

そこには自分の何十倍大きな体を持つ妖怪が座つていた

といつても体よりも顔のほうが大きいのだが

肌が赤く、アイヌ民族風の衣装と思わせる着物を身にまとっている

なんじやこいや

今まで見たこともない異形の群れに、そして正面にいる大きな妖怪に鳥居は啞然としたまま立つて凝視した

「おい、小僧。頭が高いぞ」

「総大将の前で」

「100年、いやそれ以上早いわ」

周りいる異形の群れの妖怪達が牙をむき出して威嚇する  
のどをぐるると鳴らして唸る者もいる  
彼らは本気だ

鳥居は慌ててその場にしゃがんで正座した

「お前が冷麗が言つていた怪か？」

目の前の大好きな妖怪が口を開いた  
低く重々しい声が部屋に響く

「は、はい。鳥居といいます」

「わしの名は赤河童。この奥州遠野一家の総大将だ」

総大将に相応しい還暦のある声だった

「鳥居、お前はここで何を望んでいる？」

「え……」

突然の問いに鳥居は戸惑う

「この村にいる怪は皆日々の鍛錬に励む強者ばかりだ。  
ここで生きていくためには、己を強くしていかなければならない。  
だがそれよりも大切なことは己が何者であるのかを知り、  
自身の目的を見定めることだ」

鳥居は赤河童の黒い双眸を見つめた  
澄んで濁りのない

強い意志の輝きを持つている

自分には持つていらないものだ

鳥居はうつむいた

だが意を決すると顔を上げた

「私は自分が鳥居という名前であり、元は人間でしたが  
事故で死んでしまったという事しか憶えていません」

しかし、と鳥居は言葉を続ける

「私には、……私には目的があります」

顔を引き締め

真つ直ぐ赤河童の方を見た

黙つて聞いていた赤河童はゆっくりと重々しい口を開く

「それは復讐の田だな」

「……！」

鳥居は驚いた

まさかそこまで読まれるとは思つてもいなかつたからだ

そんな鳥居の様に総大将は重々しい溜息をもらす

「どうやらお前は怪になつて間もないようだ。

まだ赤子同然

」」」で「」を見つけるといい

ぼと聞いていた鳥居はつとして

慌てて姿勢を正す

「あ、あつがヒーラーですかー。」

「お前が自身が何者であるのかと悟った時、もつ一度改めて目的を聞こへ」

「は、はー」

正直、赤河童が何を言いたいのかが分からなかつたが、取り合えず返事を返しておく

赤河童は鳥居から視線を外すと両脇にすらりと集まつていてる妖怪達を見た

「冷麗よ。いるか」

「はい、ここに」

不意に鳥居の後ろから声が聞こえた

鳥居が振り返ると斜め後ろに冷麗がいた  
全然気配とか感じなかつたのに  
いつの間に……

表情には表さなかつたものの、鳥居は内心驚いた

冷麗はきらんと正座をし、静かに頭を垂れていた

「」の小僧にいろいろ教えてやれ

「分かりました」

冷麗は丁寧に頭を下げるとすっと立ち上がる  
そしてほけと自分を見てこちら鳥居に向かって微笑んだ

「ま、行へわよ」

鳥居は我に返つて慌てて立ち上がる

冷麗はそれを確認すると、赤河童の方を向いてもつ一度お辞儀をした

「では、これで失礼します」

「つむ」

赤河童の返事を聞いてから冷麗は後ろを向いて  
そのまま部屋を出していく

鳥居もまた慌てて冷麗を追い、部屋を後にした

赤河童の屋敷からでてどれ位歩いただろうか  
両脇に雑草が生え、ろくに手入れしていないで「じぼ」の砂利道が続く  
時折吹く風が鳥居の黒髪をもてあそんでいく

「あの、冷麗さん」

「何？」

冷麗が歩く足を止めて後ろにいる鳥居を見た

「あの、ありがとうございます」

冷麗はやや驚いた表情を浮かべる  
だが、やがてくすくすと笑いだした  
「どうしたの、急に」

「いえ、……冷麗さんがいなかつたら、  
今頃私はこんな状態でいられなかつただらうつて思つから」

「それは赤河童様に感謝ね」

「は、はあ……」

会話はそこで途切れ、

冷麗は前に向き直り歩くのを再開する  
鳥居もそれに続いた

また黙々と歩くと一軒の家にたどり着いた

一階建てで木造建築

日本昔話にでも出てきそうな板張りの家だった

「ここは女妖怪達の家よ。私もここに住んでいるの  
そして、今日からあなたもここに住むことになるから」

冷麗は家の玄関を開ける

中は誰もいなかつた

「珍しいわ。皆仕事かしら」

そう咳くと冷麗は下駄を脱いで家の中へ上がる  
近くにあつたタンスの引き出しを開けると、ジヤジヤと何やら探し  
始めた

「う ん……これでもないわね……」

「何か探してるんですか?」

「あなたの服よ。その恰好より着物の方が動きやすくていいでしょ<sup>かうじゆ</sup>」

「はあ……」

と自分の服装を見る

見覚えのないセーラー服にスカート

きっと何処かの学校の制服か何がだらう

そして黒のハイソックスと革靴

もしかしたら人間として死ぬ直前に着ていたものなのかもしけない  
けど人間の時の記憶がない

もどかしい思いに駆られ、鳥居は眉を歪めた

「あ、……あつたわ！」

冷麗は嬉しそうに声を上げた

「これならどうかしら」

と鳥居のもとに持ってきたものは一着の着物柄のないシンプルな薄紫色の着物だった

「はー、いい色だと思います」

鳥居は無理に笑った

それが余りのも不自然だったのか、冷麗が不思議そうに首を傾げた

「鳥居さん、どうしたの？」

「い、いえ……なんでもないです」

「やっぱ。じゃあ、そんなとこないで、部屋に上がってこの着物を着てくれないかしら」

数分後

「ちょっと小さすぎたかしらね……」

「そうみたいですね……」

鳥居はなんとか着れた着物を見る

袖丈は少し短い

少し濁つた黄色の帯は、調度長とも足りていってやんと巻けたけどおはしょりもしたけど丈が短い

膝が隠れる長丈

「でもこれしかないのよ」

冷麗は困ったように頬に手を当てる

「いいですよ、これで。私、この色好きですし」

「本当？ ありがとう」

冷麗は両手を合わせ微笑む

「じゃあ、やつそくだけど……」

「？」

鳥居は冷麗を見た

周囲は背の高い木々に囲まれ、陽射が余り入つてこない  
そのせいで辺りは薄暗い

そんな中、川の涼やかなせせらぎの音が響いていた  
川の水は少しも濁つておらず、川底まで綺麗に見える

鳥居は川辺でひとりいそいと洗濯をしていた

横には大きな竹籠たけかごがあり、中に溢れる程衣類が入っている

洗濯物をたらいにこすり付け鳥居は黙々と洗う

「なんか納得がいかないような……」

あの後、冷麗から大きな竹籠を渡されたのだ

『はい。洗濯よろしくね』

『え』

『近くに川があるからそこで洗つて。

あと川のすぐ傍に干すところもあるから、洗つたら全部そこに干す  
といでね』

にこりと笑顔

問答無用の笑みだ

『はい……』

だから鳥居は引きつった返事をするしかなかつた

「はあ……」

鳥居は動かしていた手を休める

いい加減手が疲れてきた

「これって雑用だな」

たらいと衣類をほっぽり出して溜息をつく

ふと赤河童の言葉を思い出した

「己が何者であるのかを知り、目的を見つける事、か」

私はどうだらう

私は何者だ

私の目的はなんだ

真剣に考え込んでいると、

「おい、新米。サボつてんじゃねえぞ」

背後から声が聞こえた

「す、すみません!」

びくっと鳥居は後ろを振り返ると、そこに金髪の青年がいた  
口には何かの植物の茎をくわえている

見た目は人間そのものだ

「あん? なにジロジロ見てんだよ」

「え、あの……あなたも妖怪なんですか?」

恐る恐るきいてみる

勿論怒られるのも承知の上だ

が、青年は怒るべしろか呆れた表情をした

「お前なあ……、ここは妖怪の村だぜ？ まず人間なんかいる訳ないだろ」

「そ、そりですよね。すみません」

「俺は淡島だ。お前、冷麗の言つてた新米の鳥居だろ」

「は……」

どうして知つているのだろ？

冷麗に会い、赤河童と話してからまだそんなに時間は経っていない自分の中にはまだ少數の者しか知らないはず

鳥居の意に気付いたのか、淡島は薄く笑つた

「ここは村の中だぜ？ ちよつとした話でも風のよつよつとぐに村中に伝わつちまうもんや。」

分かつたら、さつさと仕事に戻るんだな

「あの、待つてください」

立ち去りうとする淡島を止める

「なんだよ、まだあんのか」

かなり面倒臭そうに淡島が振り返つた

「淡島さんは己が何者であるのかを知つてゐるんですか？」

……変なことを聞いていると思いますけど」

自信がだんだんなくなつて語尾が小さくなる

だが淡島は

「知つてゐるに決まつてゐだろ」

と片方の手を腰にあてた  
「俺は天邪鬼あまのじやくという妖怪だ」

「天邪鬼……？」

「そうだ。天邪鬼つていう妖怪ぐらい知つているだろ」

鳥居はこくんと頷いた

「己が何者であるのかを知るつていう事は、  
己がなんの妖怪であるのかを知るといつ事だ。  
だいたいの奴は修行でやつてるけどな」

鳥居ははつとした

何か大切なことに触れたような感覚  
立つてもいられないようなうづうづ感

「淡島さん、私に修行の相手をしてくださいませんか……」  
鳥居は淡島に食いつくように言った

「ちょ、なんだよー」

「わたしは自分が何者であるのかを知りたい。だからお願ひします

……！」

鳥居は必死だつた

余りにも必死だつたのか、じま終いには土下座までする

淡島は慌てふためいたが、腕組みして少し悩み込む

「……そんなに熱心に言つながら、別に修行の相手してやつてもいいけど」

悩みに悩んだ末、淡島は横を向いてボソッと呟いた

「本当ですか！」

鳥居の表情がぱあっと明るくなる

「ありがとうござります！」

「だが何度も言つておくがこれは修行だぜ。

厳しいのは当たり前。それでも根を出さないって誓えるか？」

腕組みをして目を細める

その瞳には修行がいかに厳しかを覗うかがわせるものがあった

それでも鳥居は迷わなかつた

右手をぎゅっと固く握りしめ、いぶ拳こぶをひとつ作る

「……はい！」

しつかり前にいる淡島を見る

淡島は鳥居の目を見た

そしてふと顔を和らげる

「お前が本当に本気だつて」とが分かつたよ。

いいぜ、相手してやる。

まあ、その前に

「

鳥居の傍に散らかっているたらいと洗濯物の方に田をやる

「そのまま向こうへ行つてしまつた

「あつ……！」

慌てて鳥居は洗濯物をかき集めた  
まだ洗濯が終わっていないことをすっかり忘れていた

淡島はくるりと背を向けるとそのまま歩き出す

「あ……」

声をかけよつかと鳥居は思つたが、

淡島がひょいと片手を上げた

「ここから北の方角にちょっとした広場がある。  
終わつたらそこに来な」

そつと鳥居の返事を待たずには  
そのまま向こうへ行つてしまつた

ぼと見送つていた鳥居ははつと我に返ると、  
残りの洗濯物をまたたらいで洗い始めた

日が真上に昇つている

調度時は正午頃か

周囲は背の高い木々に覆われている  
強い日差しが幾筋か木の葉の間から差し込んでいる

鳥居は竹籠たけかごによつやく洗い終えた洗濯物を詰め込む

「ふん……」

軽く息を吐くと竹籠を背負い込んだ  
ずしつと重さが伝わってくる  
水を含んでいる衣類を溢れる程籠に入れているせいだ

「う……やつぱり重い」

だけど

ここで文句言つても仕方ない

鳥居は立ち上がり、川辺の傍を離れた

「確か川のすぐ傍に干すところがあるって  
冷麗さんが言つてな……」

あよゐきよゐと辺りを見回す

しかし周りにそんな干すところなんて見当たらぬ

もう少し歩いたところにあるのかな

鳥居は川に沿つて前へ進む

が、右に川、左に岩の壁が何処までも続いている

「困ったなあ……」

鳥居は眉をへの字に曲げて立ち止まつた

と、その時

ふと妖氣を感じた

鳥居は口を閉じる

これは子供のような  
悪戯いたずら好きのような  
無邪氣な感じ

かなり近くにいる  
これは

「……後ろからだ」

鳥居は後ろを向く

向ひから誰かが来る

近づいて来れば来るほど、それが小さな子供であるのが分かつた  
自分より背が低い10歳前後ぐらいの少女

梅の花柄が散りばめられた赤い着物に灰色の帶  
着物は丈が膝まで。

帶は後ろの大きなちようちよ結びが印象的だった  
赤い花の髪飾りを付けた黒髪は肩まで垂れている

少女はたくさんの衣類を

抱きしめるように両手で抱え込んでいる

木の下駄をカラカラと軽やかに鳴らし、一いちに走つて来る

鳥居の田の前まで来るとぴたりと止まり、

無邪気な子供のよつに鳥居の顔をじっと眺めた

そして口を開く

「新米、新米！」

鳥居は少しむりとした

初対面でいきなり馬鹿にされたような気がしたから  
しかも自分よりも年下に……

だがぐつとこられた

こんな小さな子の対して怒るなんて大人気ない

そして少女に対し優しく言った

「ねえ、あなたはなんていう名前？」

「赤梅あかうめだよー おねーちゃんはどり でしょ」

無邪氣そうに笑う

紫色の大きな瞳。

動物のあの野生の目を連想させる

「あのね、あのね、皆から聞いたのー  
冷麗おねーちゃんとかにー」

冷麗さんのかい……？

鳥居ははつとした

もしかしてこの子も妖怪なのかな

「ねえ、ねえ、とりーはなーで何しているの？」

「え、あ……、洗濯物が終わつたから干そりつて思つてたの  
きやつ、きやつと赤梅が喜ぶ  
……」

「赤梅と一緒にだー！ 赤梅も洗濯物を干そりつて思つてたの  
きやつ、きやつと赤梅が喜ぶ

そんな赤梅を見て鳥居は氣まずそうな顔をした

「でも場所が分からなくつて……」

「すぐそこだよー。」

赤梅は指をさす

その方角は左側に広がる高い岩の壁

「え、でもそこいつ……」

「いの岩の壁の上だよー。」

鳥居は岩壁を見上げた

軽く4、5メートルはある

「確かに川の近くだけど……これは流石に登れないかも。  
さすが

遠回りして行かなきや……」

少しげつせりとじて肩を落とす

こんな重い竹籠背負つて行かなければならぬのだ

途方に暮れた時、赤梅がきやつせやつと笑いながら岩壁に近寄つていった

「とつー、しれ登るんだよー。」

そつまつとひょいひょいと岩壁を登り始める

「え……！？」

鳥居は田を見張つた

赤梅は実に軽やかに岩壁の上を登つてい行く

確かに岩壁の表面にはとんぬりのてんぬり

角みたに飛び出た突出物がある

そこに足をかけて登れば上まで行けない」ともない

……だけどす、あの子

あんなに難なく登るなんて

鳥居はそう感嘆せざにはいられなかつた

両手は衣類を抱え込んでいるため塞ふさがつてゐる

その分足だけでバランスを取るのは難しいはず……

赤梅は一番上まで登り上がると、顔だけ出し下を見下した

「とつー！ 早く、早く！』

「え……？」

鳥居は顔を上げて赤梅を見る

「とつーも姫つて来るんだよー。」

「ええ……！」

鳥居は更に口を大きく開けた

嬉しそうに赤梅はきやつきやつと笑う  
まるで悪戯を楽しむ子供のようだ

「早くしないと口が暮れちゃうよ  
やつぱりと奥の方へ行つてしまつた

「……」

鳥居は黙つて岩壁の天辺を見上げる

「……確かに遠回りすれば口は暮れるけど

岩肌に手を当てる

「淡島さんとの約束もあるし……」

鳥居は顔を引き締めると、近くの岩の突出物に手をかけ登り始めた

赤梅のよつこつまくはないが、

鳥居は這つよつこなんとかよじ登る

「わ い、不恰好、不恰好！」

上を見ると、こいつの間にか赤梅がまた顔を出していた

からかいつまつに笑いながら鳥居を見下ろしてい

「ハ、ハハセー……！」

鳥居は言葉を返すものの、

息が上がっていたため顔が少し真っ赤になる

が、その時

鳥居の手がずるつとすべる

「わっ！」

一気に体勢が崩れる

赤梅は目を覆つた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5893y/>

---

黒き椿

2011年11月21日18時10分発行